

研修報告

# 東京芸術大学陶芸研究室アメリカ研修報告

東京芸術大学美術学部 学部4年

## スケールの大きなアメリカを実感

学部4年 河内 理帆

今回のアメリカ研修旅行では、私たちを案内して下さったジョン・キーナン先生をはじめ、多くの方と知り合い、たいへんよくして頂きました。出会う人がみなさん本当に素敵で個性的で、そしてみなさんとっても明るくて情があって、はるばるアメリカまで行って良かったなど、心から思いました。一週間という短い期間ではありましたが、キーナン先生と佐々木先生が私たちのために沢山のことを用意してくださっていたおかげで、毎日が濃厚であったという間でした。

陶芸研究室で行った今回の旅行で、陶芸の分野についても勉強になりましたが、陶芸に限らず、もっと大きな人間的にたくさんの学びがありました。日本語の通じない海外の人との関わりやアメリカという国についてや、自分自身についての新しい発見もありました。

特にアメリカという国については、知らなかったことや常識をガラッと変えられる出来事も多くて、新鮮なことばかりでした。私は日本や海外に関わらず、人間の文化や生活にもともと興味があるので、そういう意味でも現地の人と関わって、一緒に生活して、その場所を案内してもらうという経験はすごく贅沢でした。アメリカに対しては、いろんな国の人がいるしそんなに治安も良くなさそうな印象があったので、実際に行ってみて、アメリカの人たちのあたたかさに驚いたと同時にもっと関わってみたいと思いました。

そしてやっぱりスケール感が日本と比べてかなり大きいので、そこにいる人たちも時間や空間の使い方がかなりのびのびしていて、その影響で彼らの作品ものびのびしているなど感じました。わかりやすい点でいうと作品の大きさです。コルビーソーヤーの先生たちがよくあな窯を焚いていることもあり、彼らの作品の中で窯に対しての比重が大きいように感じました。先生の一人である

デイビットさんは、灰が思いっきりかかるようにすごく大きくてどっしりしたものを作っていて、それが作品の存在感につながっていてとてもかっこよかったです。また、彼らは作品のコンセプトがしっかりしていて、プレゼンを聞いているのだけでも面白かったです。技術はもちろん必要ですが、技術にこだわりすぎず、土と窯そのもの、陶芸そのものを楽しんでいるように思いました。私自身は最近そういう感覚で制作をしていなかったのも、新鮮で、陶芸の魅力にまたひとつ気付かせてもらいました。個人的にはこの11月に取手の登り窯を焚くので、それに向けた良いイメージづくりにもなりました。

最後に、アメリカに行って本当に良かったです。自分にはない感覚に触れることがこんなに面白いものだと思うので、かなり刺激的でした。そしてアメリカの人たちがみんな歓迎してくださってとてもありがたかったです。記憶に残る楽しい研修旅行でした。

## アメリカ研修から学んだこと

学部4年 式場 あすか

今回の研修旅行を経験して、刺激を受けたことや記憶に残ったことが沢山あった。その中でも、今の時期にこの場所に行ったからこそ自分が感じたことを書きたいと思う。

自分の中で感じることは沢山あったが、それを現地の人に話したり伝えたり、共有できたらもっと楽しいのだろうと思った。話して伝えたいことは沢山あっても、自分が喋れることしか伝えられないというもどかしさがあった。

特に英語でのプレゼンテーションは、英語があまり話せない自分にとって、話したい内容を、言葉を選んで考えることになった。しかし、自分が作った作品で本当に伝え

たいことは何なのか考える良いきっかけになったと思う。正直、話した言葉は伝わったかわからないが、自分の中では自分が本当に伝えたかった事を知る事ができた。

また、言葉ではなくても作品を通じてコミュニケーションができたと感じる事もあった。佐々木さんに助けてもらいながら、コルビーソーヤーの哲学者の先生が自分の作品を見た時に、コンセプトや伝えたいことを感じ取ってくれていたことがわかった。自分がモノづくりの道を選んだきっかけが、言葉でなくても人に気持ちを伝える事が出来て、喜んだり、感動してもらえたりすることだった事を思い出した。

ニューハンプシャーの自然観光が記憶に残っている。このような土地や気候がニューハンプシャーの人々の優しくおおらかな人柄を作っているのではないかと思った。これからも違う土地に行くとその土地が好きになり、日本の嫌な面がわかってしまうと思う。しかし、日本で私が育ってきたからこそ出来た感性があるのだと思っている。それはこの先、変わらず自分の中にあるもので、どこへ行ったとしても、表現者として自分の中にあるもの、考えを人に伝え、そして現地の人ともっと話ができるようになりたい。

## 陶芸を通して海外の学生と交流

学部4年 清水 咲季

9月アメリカのニューハンプシャー州にあるコルビーソーヤー大学へ研修旅行に行きました。ジョン・キーナン先生のお招きで芸大陶芸研究室とコルビーソーヤー大学の陶芸の学生との合同展示会をさせていただきました。

アメリカへ行くのは今回が初めてで、期待も不安もたくさんありました。着いてみるとニューハンプシャーは豊かな自然あふれるのどかな土地で、出会う人々もいい人ばかりだったのですぐに慣れることができました。

今回は研修旅行ということで、旅行と違うのは陶芸を学ぶ目的があったのがよかったです。特に向こうの大学の方々もこちらに興味を持ってきている上で、かなり積極的に話をすることができたことは経良い験になったと思います。

海外へ出て同じ陶芸を学ぶ現地の学生との交流する機会はこれが初めてで、非常によい経験であり、とても充実したものになりました。現地の学生の作業場見学や作品たちを見ましたが、刺激になりました。

日本とはまったく違う国で、英語をつかって他の国のアーティストとの交流ができたことが、わたしにとってとても勉強になりました。

陶芸に限らず展示を見に来てくださった他科の教授などに自分の作品や、陶芸や美術についての意見を聞いたことがとてもよかったです。今後の作品の展開や将来を考えるきっかけになりました。

研修中、キーナン先生の自宅にある窯をみせていただいたり、ダートマス大学での陶芸やその他工芸の工房見学をさせていただきました。そこでは芸大にない陶芸用の道具や新しい機械などを見せていただきとてもおもしろかったです。その一方で、やはり日本の陶芸やその精神が他国の人々や陶芸家からかなり興味を持たれていることも分かりました。

また、アメリカで陶芸をやっている作家さんのデモンストレーションを見せていただきました。同じ目的でもわたしが普段製作に使っている道具とは全く違うものを使ったり、ひび割れや練り込みなど普段あまりみることのできない面白い技法を間近で見ました。

研修旅行を終えて、一週間はとても短く感じました。日本を出てアメリカの陶芸や人々を感じ、陶芸の奥深さをまた一段と実感することができました。

## 言葉の壁を乗り越えて

学部4年 高橋 侑子

今回のアメリカ、ニューハンプシャー研修ではコルビーソーヤー大学を中心に様々な場所に行きました。ボストン美術館をはじめ、町の小さなギャラリーで行われていたデンマークの陶芸作家の展示に行ったり、多くの美術作品に触れることができました。中でも印象的だった美術館は二日目に行ったイザベラ美術館で、屋敷と持ち主のコレクションが展示されている美術館です。家具や絵画、窓のステンドグラスやカーテンのレースまでコレクションされた美術的価値の高いもので、日本の屏風なども展示されていました。また屋敷の中央が吹き抜けになった庭にはたくさんの植物が美しく、彫刻作品が置かれていたり、床がタイルになっていてモザイク画になっていたりしてとても素敵でした。

また、コルビーソーヤー大学を中心に、ダートマス大学、ニューハンプシャー大学での同世代の陶芸を学ぶ学生との交流ができたことはとても刺激になりました。研究室

の雰囲気や大学の学生の雰囲気が藝大とは全く違って新鮮でした。コルビーソーヤ大学内での作品展示ではあちらの一年生の授業内で自分の作品について紹介、説明する機会がありましたが、英語での説明はなかなか作品のコンセプトの細かいニュアンスを伝えるのが難



しかったです。しかし自分が話したことについて学生たちが理解してくれていたり、反応してくれたり、興味を持ってくれたことはとても嬉しいことでした。レセプションでは他の大学の陶芸の先生、彫刻の先生方に作品をみていただき、感想を聞けたり意見交換をすることができました。

その他にもいろんな場所に行き、とても良い経験にな



りました。また今回の研修で海外の芸術についてもっと学びたいと思い、海外で学ぶことに対する興味が強まりました。この研修で見たもの、経験したことを忘れずに自身で生かしていきたいです。また、今回知り合った学生、先生たちともこれで終わりにせず、これからも繋がりを持ち続けていこうと思います。とても良い経験になりました。